

山田耕筰の独唱曲（第1報）

露風の詩による作品

森 久見子

Songs by Kôsaku Yamada (I)

Works to Poems by Rofu Miki

Kumiko MORI

緒 言

二年程前、「美しい日本語で日本歌曲を歌う」ことを主旨とした作曲家、詩人、演奏家のグループに参加することになった。主な活動内容は、日本歌曲の古典から現在活躍中の作曲家の作品を研究し演奏することと、今後が期待される作曲家の作品を紹介することである。これを期に日本歌曲に対し積極的に取り組むことにした。

山田耕筰（1886年6月9日東京で生まれる、1965年12月29日同地で没）を研究対象としたのは、彼の作品とともに生き方にも関心を持ったからである。日本における西洋音楽の歴史は山田耕筰を除外して語ることはできない。明治、大正、昭和の三代にわたり数多くの作品を残したというだけでなく、西洋音楽の古典から同時代までの音楽を日本に紹介するために楽団を組織し、自ら指揮者として演奏活動も行った。現在、日本の西洋音楽は世界的水準に達しているが、山田はその礎石を築いたといえる。

本論では、山田の独唱曲を概観したうえで、その初期の代表作歌曲集〈露風之巻〉を主たる研究対象とした。

独 唱 曲

山田耕筰の作品は今日作曲の事実が確認されたものだけで1951曲にのぼる。声楽曲697曲、器楽曲155曲、舞台及び付随音楽41曲、編曲202曲である。ベルリンへ留学し本格的に作曲を学び始めた以後の作品に限定するならば、最初の曲は1910年5月11日のP. B. シェリー（Percy B. Shelley）詩〈うたのしらべの（Music, When die）〉である。日本語の詩によるものは翌12日の作品吉丸一昌詩〈水の皺〉である。最後の作品は1962年11月の土屋文明詩〈おなじ時代に〉である。このように山田の作品は歌曲で始まり、歌曲で終わっている。山田が使用したテキストの作者は150余名にのぼるが、代表的詩人は三木露風、北原白秋、大木惇夫、川路柳虹、野口雨情、西条八十等である。

山田の音楽との出会いは、まず家庭で父母と三人の姉が歌う賛美歌やオルガンの音であり、築地の外人居留地で日常耳にする異人館のピアノの音であった。こうして5、6才の頃すでに芽生えた山田の音楽に対する夢をさらにふくらませたのは、長姉恒子の夫エドワード・ガントレット（Edward Gauntlett 1868～1965）である。彼は牧師であったが、教育者でもあり、ま

た自らパイプオルガンの公開演奏も行うなど音楽的素養の持主だったのである。

山田の音楽創作は声楽曲を主軸としており、歌曲及び童謡の作曲は生涯にわたり続けられている。山田は東京音楽学校では声楽科を卒業している。ベルリンで作曲を学んでいた時にも声楽の指導を受け、一時的にしる声楽家になることに心を動かされたこともあり声楽に対して強い関心を持っていたと考えられる。

山田の独唱曲は三期に分けて考えられている。小島美子氏は、初期は1917年まで、中期は1928年まで、後期はそれ以後の作品と分けている。以下この区分に準じて概観することにした。

第一期 約30曲が作曲されている。そのうち24曲がベルリン時代（1910年～1913年）の作品で、その基礎となっているのはドイツロマン派の歌曲のスタイルである。ベルリンでの最後の作品〈わが世の果ての〉を作曲している頃より、日本語のテキストに作曲することについての疑問——とりわけ外国語の強弱アクセントに対し、日本語の場合は高低アクセント、すなわち抑揚——を持つようになった。1916年1月の作品〈唄〉が完成したとき、山田は「極めて僅か乍らある満足を得て居る」と述べていることから、この作品で独自の音楽の方向を見いだしたといえる。しかし〈唄〉以後の独唱曲ができるまでに1年半以上のブランクがあり、その間はピアノのための作品で埋められている。そしてこの期のスタイルを完成させた〈野薔薇〉ができあがった。美しい旋律でテキストの内容がよく表現されており、山田の代表作の一つである。

第二期 〈野薔薇〉で芽生えていた伝統的な音楽に対する意識を発展させた時代であった。伝統的なリズムや、第4音と第7音を抜いた五音音階を基調として巧みに作られた作品が見られる。1922年に北原白秋の詩との出会いがあり、同年の連作歌曲〈AIYANの歌〉、〈かやの木山の〉、〈六騎（ろっきゅう）〉など一連の代表作が作られ円熟期を迎えた。

第三期 日本歌曲にとって一転機の時期であった。1928年に橋本国彦が新しいスタイルの歌曲を発表し注目された。橋本の新しいスタイルを山田も認めているが、彼自身はそのまま独自の方向に進んだ。山田の独唱曲に対する情熱は、以後次第にオーケストラ運動やオペラに対する関心に移っていくものの、独唱曲は独自のスタイルで晩年まで作曲し続けられた。独唱曲は作曲家山田にとって最後まで持続的な音楽の中心であったといえる。

表 三木露風の詩による独唱曲年代順一覧

曲名	作曲年代		年令	初演・初版		備考
	年	代		初演	初版	
1 嘆き	1910.7.27	明治43	24歳	初演1914.2.13	外山国彦	献呈 岩崎小弥太男爵
2 風ぞゆく	8.2			初演1914.2.13	船橋栄吉	同上
3 異国	8.3			初版1919.9刊	「山田耕作歌曲集〈露風之巻〉」	同上
4 燕	8.3			初演1916.1.30	山田(永井)郁子	同上
5 ふるさとの	1911.1.8	明治44	25歳	初演1914.2.13	船橋栄吉	同上
6 信仰と牢獄	1913.6.22	大正2	27歳	初演1914.2.13	三浦環	同上
7 すすり泣くとき	6.22			初演1914.2.13	船橋栄吉	同上
8 樹立	6.23			初演1914.2.13	三浦環	同上
9 わが世の果ての	6.23			初版1913.9	雑誌「音楽」	同上
10 唄	1916.1.20	大正5	30歳	初演1916.1.30	山田郁子	同上
11 野薔薇	1917.8.25	大正6	31歳			
12 風に思を	1919.8.7	大正8	33歳	初版1920.11刊	三木創作楽譜9	
13 湧く泣				同上		
14 夜曲				同上		
15 みなぞこの月	9.17			初版1921.9刊	三木創作楽譜10	
16 待宵草				同上		
17 海鳴り	1920.3.29	大正9	34歳	初版1920.6	雑誌「少年倶楽部」	

表 三木露風の詩による独唱曲年代順一覧

曲名	作曲年代	年令	初演・初版	備考
18 風によせてうたえる春の歌3	4.20		初演1922.6.15 荻野綾子	献呈 土方与志・梅子(祝婚曲)
19 風によせてうたえる春の歌4	4.22		同上	同上
20 風によせてうたえる春の歌1	4.23		同上	同上
21 風によせてうたえる春の歌2	4.23		同上	同上
22 山づたい			初版1920.7 雑誌「少年倶楽部」	
23 風車の歌			初版1920.11 雑誌「少年倶楽部」	
24 きりぎりす			初版1920.11 雑誌「金の船」	
25 よしきり	1922.4.16	大正11	初版1923.6 雑誌「良友」	
26 黒い坊さん	5.5		初演1922.6.15 外山国彦(あるいは荻野綾子)	
27 病める薔薇	5.10		同上	
28 木の洞	5.11		初版1922.12 雑誌「詩と音楽」	
29 ほととぎす	7.13		初版1922.9 雑誌「良友」	
30 光りのお宮	7.30		初版1922.10 雑誌「童話」	
31 小鳥と蝸虫			初版1922.10 雑誌「良友」	
32 母鳥子鳥	8.31		初版1922.11 雑誌「良友」	
33 秋の夜	9.29		初版1922.12 雑誌「良友」	
34 星	9.29		初版1923.1 雑誌「良友」	
35 狸橋	10.4		初版1922.11 雑誌「詩と音楽」	
36 漁火	12.4		初版1923.2 雑誌「良友」	
37 ちんころ小犬	1923.1.14	大正12	初演1923.2.23 花鳥秀子	
38 春の磯辺	2.17		初版1923.4 雑誌「良友」	
39 春の唄	3.5		初版1923.5 雑誌「良友」	
40 やまと少女の歌			初版1924.9刊 セノオ楽譜	
41 円いお月				未完
42 爾は尚うるわし	1924.5.8	大正13	初演1924.5.22 外山国彦	献呈 外山国彦
43 チラチラ小雪	1926.12.30	昭和1	初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集23」	
44 コスモスと蝶々	12.31		初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集24」	
45 雲雀	1927.1.22	昭和2	初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集21」	
46 青蛙	1.22		初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集22」	
47 一本松	1.22		初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集26」	
48 山桜	1.22		初版1928.2刊 「山田耕作童謡百曲集62」	
49 赤とんぼ	1.29		初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集27」	
50 秋まつり	1.29		初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集28」	
51 夕焼雲	1.30		初版1928.7刊 「山田耕作童謡百曲集56」	
52 冬	1.30		初版1928.2刊 「山田耕作童謡百曲集63」	
53 蟬	1.30		初版1928.2刊 「山田耕作童謡百曲集66」	
54 土筆つみ	1.31		初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集25」	
55 雀と鶯	3.		初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集30」	
56 とんぼがえり	3.6		初版1927.7刊 「山田耕作童謡百曲集29」	
57 光りのお宮II			初版1928.2刊 「山田耕作童謡百曲集61」	No.30と同じ詩
58 山彦	3.8		初版1928.2刊 「山田耕作童謡百曲集64」	
59 古井戸	1927.3.8		初版1928.2刊 「山田耕作童謡百曲集67」	
60 お友だちといっしょ	3.8		初版1928.1刊 日響楽譜114「童謡百曲集68」	
61 蝶々	3.8		初版1928.2刊 「山田耕作童謡百曲集69」	
62 春が来た	3.8		初版1928.2刊 「山田耕作童謡百曲集70」	
63 青い湖	不	明		1921.12刊 露風詩集「真珠島」に楽譜所収
64 かっこう	同	上		同上
65 式日唱歌	同	上		
66 一五夜	同	上		1923.8刊 「小学生の歌2」所収
67 植林の歌	同	上		1927.12刊 「小学生の歌6」所収
68 睡れよ我が子	同	上		1921.12刊 露風詩集「真珠島」に楽譜所収
69 雲雀	同	上		1923.8刊 「小学生の歌2」所収
70 泉	同	上		1923.8刊 「小学生の歌2」所収
71 冬の朝	同	上		1923.8刊 「小学生の歌3」所収
72 麦打	同	上		1927.12刊 「小学生の歌5」所収
73 芽	同	上		1923.8刊 「小学生の歌3」所収
74 れんげ草	同	上		1923.8刊 「小学生の歌4」所収

三木露風の詩による独唱曲の年代順一覧

山田耕筰編年体作品表を基にして、三木露風（1889～1964）の詩による独唱曲の年代順一覧を制作した。露風の詩を用いた作品は76曲あり、作曲年代の判明しているものは独唱曲62曲と合唱曲2曲、年代不明のものは独唱曲12曲である。ちなみに声楽曲ではないが、1913年の交響詩〈暗い扉〉は露風の詩「暗い扉（詩集「廃園」より）」のイメージを音楽化したものである。ここでは作曲年代の判明している作品についてのみ考察する。

1910年～1913年のベルリン滞在中すでに9曲が作曲されている。次いで1916年～1927年の間に53曲が作曲された。1927年3月8日の〈春が来た〉が最後の作品であり、それ以後露風の詩による独唱曲はない。

山田が露風の詩集を初めて手にしたのはベルリンへ出発する時であったといわれている。帰国後は露風の主宰する文学的サークル“未来社”とも交流があった。北原白秋の詩による作品数に比べれば決して多い数ではないが、1916年の〈唄〉で日本語の詩の作曲法に開眼し、1917年の〈野薔薇〉で彼独自のスタイルを確立するなど重要な時期に露風の詩が使われている。

歌曲集〈露風之巻〉

歌曲集〈露風之巻〉には1910年から約4年間のベルリン留学の間に作曲された9曲と、帰国後3年目に作曲された1曲の合せて10曲が収録されている。いずれも詩人三木露風の詩をもとに作られたものであることから〈露風之巻〉と標題が付けられた。第9曲までは詩集「廃園」の、また帰国後の作品第10曲は詩集「幻の田園」の中の作品である。詩集「廃園」はベルリンへ出発する際、友人より贈られたものである。その友人とは川上淳であるといわれているが定かではない。第9曲までは山田のベルリン留学の支援者岩崎小弥太男爵にささげられている。

山田は1910年3月5日留学地ベルリンに到着以来、王立アカデミー音楽学校の入学試験を皮切りに我武者羅な勉強や言葉のハンデのため心身共に疲れきっていた。やがて夏期休暇に入り心身も回復に向い下宿の近くを流れるシプレエ河のほとりを散歩するのが日課となった。その折に作曲されたものが最初の4曲である。半年後には第5曲が書かれた。次の4曲は1913年初めに音楽学校を退いた後、1年間自由に過した間の作品である。前の5曲は山田のホームシック的な感情がうかがえるが、後の4曲は感情的なものより音楽上の変化が見られる。山田は歌曲集〈露風之巻〉の序文で次のように述べている。「然しその頃から私の頭には、邦語の詩を歌曲に作曲すると云ふ事に就いて色々の疑問が生じて来た。単にもやの様な感情のみを土台として詩の韻律、唱歌学上より見たる唱歌発音法、及至日本語そのものの発音等の問題を顧視する事なく、極めて無智な極めて暢気な寧ろ気まぐれと迄云ひ度程な心持で邦語の歌曲を創作するの頗る危険なる事に気がついた。また一方より云へば、言語そのものの力を疑ひ出したのであった。かくして私は、邦語の詩と思わず離れて行った」²⁾この疑問は第10曲を作曲するまで続き、第10曲が完成した時山田は「ある満足」を得たのであった。

1 テキスト

詩集「廃園」 三木露風第2詩集

「廃園」「涸れたる噴水」「暗い扉」「推移」「廿歳までの抒情詩」の5部構成で、1906年～1909年の作品108篇が収録されており、「私の青春の一時代の感情を詩想に表わし、一面に、私の居住していた東京市外雑司ヶ谷の六舎の在子園が廃園の趣があったためである」³⁾と後に作者が述べている。初版は1909年9月光華書房刊行である。

第1曲〈嘆き〉 Tranquillo e dolcissimo 全40小節

第2曲〈風ぞゆく〉 Allegretto facile 全56小節

第3曲〈異国〉 ♩=63 全44小節

詩集「幻の田園」 三木露風第5詩集

1913年の秋頃から約2年間の作品55篇を収録したものである。「私が池袋に住んでいた時の作品で、この詩集は、象徴詩集と言って宜しい。私のその頃の人生観及び自然に対する観照を、象徴化したものが多い」と作者は述べている。初版は1915年7月東雲堂書店刊行である。

2 第1曲～第5曲(1910年～1911年作曲)

この時期は山田の歌曲創作の出発点に当たる時であり、全体的にドイツロマン派の影響が濃い。旋律の流れは自然で美しく、伴奏は象徴的なものである。第1曲の「泣きにし」という言葉の部分で意識的——もちろん技術的なものであるが——に不協和音を使用していること、また第2曲の最後「ああひとり」が二度繰返される部分で、初めは *mf* 二回目が *p* のデュナーミクの指示は非常に日本的である。(譜例1) 第3曲はピアノの三連符のリズムと半音階を含む音形で燕を描写し、歌が広い音域で歌われる伸びやかな曲である。

第4曲では歌と伴奏が独立し、曲の発展が見られる。伴奏がワンパターンなものから、旋律的部分や和声的部分を含む変化に富むものとなり、作品が音楽として重層的な書き方になってきている。第5曲を作る頃には、西洋音楽を緻密に聴くようになり、技法を深く追求するようになった。歌の部分は旋律的なものに対し朗唱的なものが入り入れられている。和音の色彩を追求しはじめ、音色を歌に合わせようという意欲が出ている。リズムや拍子に伸縮性が見られ、リズムに開眼したものと考えられる。

第4曲〈燕〉 Allegretto graxioso 全58小節

第5曲〈ふるさとの〉 ♩=92 Tremando melodioso 全74小節

譜例1

3 第6曲～第9曲（1913年作曲）

山田はこの4曲を作曲するまでに、楽劇〈墮ちたる天女〉、卒業作品である交響曲〈かちどきと平和〉や交響詩〈暗い扉〉などの大作を完成させている。当然のことながらそれが歌曲にも反映しており、前5曲に比べ新しい技法が試みられ、音楽の作り方がより重層的なものとなっている。

第6曲はリズムのオスティナートの上に和音の響を考慮しており、増音程を旋律に組み込んでいく手法や、休符の使い方に新しいものを見る。第7曲は歌とピアノの右手がからみ合い、

第6曲 〈信仰と牢獄〉 ♩=69 Tranquillo elegiaco 全44小節

第7曲 〈すすり泣くとき〉 ♩=56 Tranquillo 全24小節

第8曲 〈樹立〉 ♩=88 Lesto Amabile 全20小節

第9曲 〈わが世の果ての〉 Lento cantabile 全16小節

譜例 2

第10曲 〈唄〉 ♩ = 112 Legeramente amabile 全52小節



さらにピアノの右手は層に分かれている。旋律と和音の変化の多い表出意欲を感じるモダンな作品である。当時、山田は R. シュトラウス (Richard G. Strauss 1864~1949) に傾倒しておりそのモダニズムの影響を受けたと考えられる。デュナーミクの指示が多い曲である。

第8曲は特記すべき新しい手法はないが、8行の詩を三連符の伴奏にのせて一気に歌いきるさわやかでスマートな曲である。第9曲は調性の浮動性によって「さすらい」を象徴していると思われる。複雑な和音が続き無調に近く、歌は劇的な朗唱の要素を持つアリオソで、第一義的に感情表現を目ざしている。(譜例2)

4 第10曲 (1916年作曲)

テキスト

唄

日が光るのみ、幼き子が唄へば
 「蝶々、蝶々」
 かくうたへば。
 草の間をさやぎて出づる水
 また微風の
 喜悦の喉。
 誰がうたふ、独りならで
 遍ねき中に
 そが唄を
 はてしなき空のきはみ
 在るとなし、光る顔
 緑なる幻に。
 ながるる白き野川の水
 木も草も
 おのづからなる伴奏せ。
 日が光るのみ、幼き子が唄へば
 「蝶々、蝶々」
 かくうたへば。

この曲は帰国後の作品であり、テキストもこの曲のみ詩集「幻の田園」の中の作品である。作曲年代や手法を見ると、歌曲集〈露風之巻〉にあえて収録する必要を感じない。後藤暢子

氏はそれについて次のような見解を述べている。「第19回山田アーベントにおいて、他の8曲が演奏された機会にアンコール曲として作曲された。また、山田が歌曲集〈露風之巻〉の序文に『私は然し、この〈唄〉に於ては、極めて僅か乍らも、ある満足を得ている』と述べており、当時の新しい成果として入れたのではないかと思う」

テキストは6節から成る詩であるが、旋律化されて声で歌われるのは第1節、第3節、第6節のみで、第2節、第4節、第5節は歌われずピアノで描写的に表現される。ピアノが伴奏の域を出て大きな役割を果たしている。前記の詩に見るとおり、詩人露風は「蝶々」と歌う幼き子の姿をテーマにしている。作曲家山田はこの「蝶々」に小学校唱歌〈蝶々〉の旋律を引用した。〈蝶々〉の原曲はスペイン民謡である。1871年に野村秋足と稲垣千穎が日本語の歌詩を創作して小学校唱歌とした。明治期の古い唱歌は、このように外国の旋律に日本語の歌詩を当てはめて、日本人が歌えるようにしたものが多かったのである。殊に〈蝶々〉は露風と山田が自己の芸術作品に引用するほど、すでに日本人の生活の中に浸透していた。〈唄〉における〈蝶々〉の引用問題は綱干毅氏の「洋楽受容期におけるある『満足』」の中で洋楽受容研究の方法論にまで発展させられている。

自伝によれば、山田はベルリン留学中より日本語の詩を歌曲にするということに疑問を抱いていた。帰国後も1915年のE. メーリケ (Eduard Mörike) 詩〈愛するひとに (An die Geliebte)〉やH. C. フォン・シュタルケン (Hans Caspar von Starcken) 詩〈贖罪 (Sühne)〉といったドイツ語の歌曲を作曲しており、日本語のテキストを積極的に取りあげるのを避けている。〈唄〉は先述のように「山田アーベント」のために彼が久々に作曲した日本語の歌曲なのである。

山田は〈唄〉の作曲に際して詩と音楽の「溶合」を求め、その成果に「僅か乍らも、ある満足を得て居る」のである。ここで山田の言う詩と音楽の「溶合」とは何か？ 一般的にロマン主義思想の一側面として、詩人や音楽家たちに19世紀から詩と音楽融合の理念があったことはすでに小島美子氏も指摘している。だが山田耕筰の場合——とりわけ〈唄〉の場合——についてもう少し具体的に考察するならば、当然、詩の言葉の抑揚と旋律の一致の作曲法が思い浮かぶ。山田はいずれ(1920年に入ってから)日本語が強弱ではない高低アクセントであることをふまえたこの作曲法を強く主張するようになるが、後藤暢子氏も語っているように1916年〈唄〉を作曲した時、引用した唱歌〈蝶々〉の歌い出し部分が偶々この原則に当てはまっていたことから、のちに展開する日本語の抑揚と旋律の一致という作曲法のヒントを得た可能性もある。それが歌曲集〈露風之巻〉の序文で彼がいつている「ある満足」の内容なのかもしれない。

結 語

今回、作品研究として取りあげた歌曲集〈露風之巻〉は、極く初期の作品を収録したものだが、山田耕筰独自のスタイルを確立した円熟期の代表作とはまた趣も異り興味深いものである。

この研究で理解し得た山田の生涯や作品、その作曲年代や背景をより深く考察しながら、引き続き露風の詩による作品を研究し、演奏体験まで発展させたい。

注

- 1) 山田耕筰：歌曲集〈露風之巻〉序，4，大阪開成館（1919）
- 2) 山田耕筰：歌曲集〈露風之巻〉序，3，大阪開成館（1919）

- 3) 高梨 茂：日本の詩歌 2, 305, 中央公論社 (1979)
- 4) 高梨 茂：日本の詩歌 2, 347, 中央公論社 (1979)

文 献

- 1) 社団法人日本楽劇協会：この道—山田耕筰伝記—, 恵雅堂出版株式会社 (1982)
- 2) 後藤暢子：山田耕筰編年体作品表, 遠山音楽財団附属図書館 (1983)
- 3) 小島美子：民族的な音楽への先駆者たち, 音楽の世界 (1962)
- 4) 山田耕筰作品資料目録, 遠山音楽財団附属図書館 (1984)
- 5) 安部宙之介：三木露風の研究, 株式会社日本図書センター (1983)
- 6) 三木露風：詩集, 筑摩書房 (1977)
- 7) 山田耕筰：歌曲集〈露風之巻〉, 大阪開成館 (1919)